

第三輯

第五期 最近史

四ヶ町村合併より市制施行まで

蒐録所感

本編は岸和田發達史中最も新しい史實たる「四ヶ町村合併の前後から現在の如き市制施行に至るまで」に關し近々十數年間の發達變遷を主として收録したものである。

市制の實施は云ふまでもなく、四ヶ町村の併合と云ふも、僅かに約十年以前のことだから史料は頗る新しい。斯く新しいにも拘らず、四ヶ町村合併當時の有様の如き何等の記録を止めてゐない、甚だしきに至つては、現在の市役所には當時の關係各町村會議員や聯合組合會委員の名簿さへも、更に合併以後遂年の出來事さへも記録として見當らない。況して合併の依つて來る處の細大漏れざる原因、或は今日の隆盛發展を來せる系統的誘因等に至つては勿論記録の上に求められやう筈がない。

想ふに明治維新前までは、岡部藩時代に於て見るも、歴代の藩侯少なからず文教に力を用ひ小さいながらも教育機關が備つてゐて、其の普及の程度に於ても當時の諸藩に比較して遜色なく寧ろ盛んな部類に屬してゐたと傳へられてゐる。

斯くの如く一般の頭に練武修學の熱のあつた時代には古文書

類に對しても理解があつたものに相違ない、従つて藩として保存して來た記録以外にも各個人の手記に成れるものも多かつた事と考證される點が少なくない、更に該藩以前に溯つて考へて見ても、よし屢々兵火の巷と化し去られた時代があつたにせよ之亦記録に關しては同様の感がある。

然るに明治維新後當岸和田並に同地方人の頭は極端なるまでに物質主義に傾き、經濟界に没頭し古來からの試魂文想も悉く金儲の道にし自己の處世も子弟教育の方針も奇麗に轉換して深く／＼踏み入り終せて了つたのであつた。

地方人の思想が斯くの如く著しく物質的に變化した結果は、文學とか教育或は古文書の趣味保存と云つた様な考へは、自から稀薄となり若しくは消滅して了つて、之等書類の價值を没却し或は認め得ないで屑紙同様に見做し貫幾何かの財貨に替へ或は之を燒却する等實に遺憾な處分をしてを了つたものであつた、従つて最近の記録の存在しない原因も亦同様思想の變遷の結果として生ずべき理由の下に推定し得られやうことである。

今四ヶ町村を併合して岸和田町制を施き、爾後約十年にして市制を實施するに至る其の間の發達變遷其他重要な出來事、記憶すべき事像等を考查採録せんとするに當つて、此處に按ずるに、最近十數年間の岸和田は往古以來數百年間の岸和田に比して、遙かに多角形なる變遷を示し、大なる加速度を以て異數の

發展振を描き出してゐる點に於て、其の發達史上却つて重要な位置を占むべき事は恰も日本史上に於て將來明治大正史を繙くと同様の感をなさしめるものと信ぜざるを得ない。

斯くの如く多様の變遷を示し異數なる發展振を現出した事は、斯くあらしむべく出來てゐた岸和田は岸和田として持つ特種の原因に基く當然の結果であることは疑ひもない事實である。

此處に本編を起稿するに當つて過去を按じ現在を觀察する時、そこに當地發達の系統は經濟的進程を離れて殊に工業都市である以上工業界の盛衰變遷の歴史を描いて他に原因も結果も考へ得ない、

斯くの如き見地から考察して以上の如き特種の原因を求むれば此處に主大脈流の進る、三大源泉を認める事が出来る

尤もこは就中大なるものゝ摘出であるから、此の外にも種々幾多のより小なる誘因基因其他個人法人と細大多様の功勞者もあつた事は勿論である。

此處に本編の消極的範圍とするは、四ヶ町村の合併當時の右様から市制施行までの約十年間の史料を蒐録するを以て使命とするのではあるが、然し是が依つて來る原因を系統付けて置く事は之亦積極的の使命であり、將來之を繙かんとするものゝ要望でもあらう事とも信じた故に以下「梗概」として之を收め遂次項を追ふて消極的範圍に入る事にした。

然れども本編の爲に蒐集せんとせる史料は、前述の如く參考とすべき記録が極めて稀で其の大部分は之を現在存命中の當時事業又は事件或は問題の中心人物及關係者の記憶を辿つて口傳的に蒐めたものである、従つて數字的事實の上に細微を缺くあるを遺憾とする。

一般に口傳に依る場合は、裏面史を窺ひ得る機會の多きを利とするけれども、記憶は記録と異つて確實不變のものではない、年を経るに従つて稀薄から消滅へと推移を來すものであり且つ人に依つて保持期間に相違がある。

斯く相違があるべきものにして、同一事柄に對して多くの記憶を蒐集して比較考査した時其れ等の總てに共通なる點は、之を歸納的に事實として決定する場合先づ信憑を描いて可ならんと考へた。

大正も十二年の今日「岸和田」と云ふ、一地方史の編纂、殊に其の一部分なる最近史を蒐録するに當つて地方人の記憶を辿る口傳に依らねばならぬ已むなきに逢着した時、偶々古い史實がフウと頭に浮んで來た、それは人皇四十二代元明天皇の和銅年間の事であつた、彼の稗田阿禮が當時よく記憶を誦する時人を集め之に語らしめてなせる古事記の編纂だ、今を去る一千二百余年の昔と岸和田に於ける今日と只此の一事のみ何んぞ餘りに懸隔の少なきと、思はず苦笑した、(二五八年四月茅海に面して青城生)

前編 梗概

第一項 最近發達の三大源泉

其の一 金融機關の先鞭

岸和田地方一帯は往昔和氏以來の諸豪族の割據地あり近くは徳川時代の初期から岡部藩五萬石の城下であつたとは云ふものゝ、稍人家の密集せる村落、否一漁村的商工部落に過ぎなかつた、それはサ程遠い昔ではない、現に中年以上の地方人が悉く知る如く、明治維新後の最近までの事だ

それが現在市制を實施されてゐるのだから、岸和田沿革史の全頁を通じて最近短日月の間に急速なる發達を遂げたのだと云ふことは事實の上から否定が出来ない事である。

今その發達系統を觀察するならば、徹頭徹尾經濟的進程を辿つて進んで來たものと云へる、然も單に經濟的と云ふも決して廣い意味ではなく、一に工業經濟の消長に左右せられつゝ伸展し來つた、殆ど純然たる工業都市である、

試みに市の南方に踞然として聳え、前面茅海の彼方に淡路島を望み後方田園を距て、葛城山麓を瞰下し得べき岸和田の展望臺蜚龜利(藤)城趾の四隅に立つて目を展開せば一眸の眼界は林立せる煙突と而して其の吐出する瀝煙は晴快の天に雲なすを觀するであ

らう、

盛んなる哉岸和田の工業！岸和田は明かに工業都市である、更に再び西側の一隅に立つ時、直下に蓮池を隔て、目に映ずる洋館新築の一大建造物、それは株式會社五十一銀行である、想ふに片田舎に過ぎなかつた岸和田の一遍郷を化して町となし煙雲の突筒を林立せしめ、三萬の人口を包容する一大工業新都市を形成せしめた根本原動力は之を期して泉州創始の金融機たる當五十一銀行の前身に認めざるを得ない。

岸和田をして泉州南部壹百數十ヶ町村と、泉北の一部を包含し敢て其の産業經濟の中心をなさしめ、產物集散の關門鍵を握らしめた、源泉、それは如何にしても、一に府下各郡に數歩の魁して金融機關創設の先鞭、即ち第五十一國立銀行の設立にあつたのだ

國立銀行の設立 抑も之れが株式會社五十一銀行の前身で、明治初年舊藩主岡部長職子が歐米遊學を終へて歸朝の土産に、銀行設立を極力主張した結果、士族間の同意する處となり、奉還賜金券を醸出し其の地方有力者も賛同を表し此處に左納權一、川井爲己、寺田甚與茂、田代環等の諸氏の盡力奔走に依つて、明治十一年十二月資本金拾萬圓を以て創立認可されたものである、

當時金融機關としては、大阪府下に於ては堺に浪華銀行の前身たる第二十二國立銀行一つを有するのみであつたから、泉南地帯は勿論のこと泉北の一部までも包含され

其の所在地たる岸和田を焦點として、此處に産業經濟界の強い交流が起り、自然泉州に覇者たるべく岸和田は發達の氣運を胚胎した。

古今を通じて岸和田發達史に千歳の芳花あるべしと雖も苟も最近史に、特筆太書せんと欲するは、我中央は王政復古の業既に完成し、舊藩諸侯を初め一切の士族に至る迄で、榮華の夢は最早や醒めて昔日、武士は食はねど高楊子と云つた様な思想も、何うやら怪しくなつて、全國を擧げて、産業立國のモットーは頻に耳朶を打ち、弓矢より算盤へ、武士より町人への過渡期に入つた、折しも泉州の一片田舎岸和田の地に早くも金融機關設立の先鞭を付けた功績を、蓋し之を斷じて岸和田をして今日あらしめた最大源泉なりとなすの觀察である。

其の二 綿糸布仲買人と木綿問屋

岸和田綿糸布仲買人の活躍

泉州の地一帯は元來木綿機業の最も旺盛な處である

そは、今を去る一千四百五十年の昔、人皇第二十一代雄略天皇の御代に遠く三韓の地から機業の技術者を聘して隣接地なる河内の國に於て、綿糸布の紡織をなさしめた關係上、我泉州も其の餘慶を受けて古來木綿製造に従事するもの多く爾來其製品の名は河内木綿として總稱的に全國に普く知られてゐた、

然れども從來は最近に至る迄、總て小規模なる家庭工業に過ぎなかつた、

斯くの如く小規模であり、微弱なる家庭工業には過ぎなかつたけれども、其の同業者の多數は自ら多額の生産高を示しつゝあつた事は事實である、

されど明治二十七年岸和田紡績が開業される迄は、泉州に一の紡績工場なく、之等多くの機業家の需要を満す、多額の原料綿糸は、不完全ながらも岸和田港を利用しつゝ之を悉く大阪の市場に仰がねばならぬ立場にあつた。

而して斯くの如き小規模に過ぎなかつた一般機業家は小資本の故を以て、直接製造元或は大阪問屋から、直取引をなすの能力なく必ずや多額の口錢を恣にせられながら大阪仲買人の手を経て之を求め且つ自己の製品たる綿布も亦小額の理由を以て同一經路を經るでなければ市場に現れ得ないと云ふ状態に位置してゐた。

此時に當つて機を逸せず利に鈍ならざる岸和田商人中殊に綿糸布關係の仲買人はむざ／＼大阪仲買人の爲に自己地方の利益を壟斷されつゝあるを袖手暇過する筈がない。

此處に於て岸和田綿糸布商仲買人の一大躍動を見るに至つたのである、

それは、明治二十年前後から同二十六年七年の間の頃で恰も岸和田煉瓦會社を設立つべく企の聲が起つてゐた前後から岸和田紡績

株式會社の創立開業に至る數年の間であつた。

時は既に南泉州唯一の金融機關たる第五十一國立銀行は早や岸和田に生れてゐた、岸和田は既に已に泉州に於ける經濟界の中樞たる運命の上に立つてゐた。

されば同地商人が少なくも泉州の地に覇をなすべく雄飛せんに期は圓熟してゐた。

此頃岸和田に於ける仲買人として綿糸布界の牛耳を握つてゐたのは、岸村徳平、覺野楠太郎、岡田伊平、小瀬勘平、寺田儀平の諸氏であつた。

此の際同氏等は憤然立つて大阪仲買商人の取れる侵略的經路を防壓すべく、製造元並に大阪筋問屋に向つて原料糸の直取引を開始し、而して地方小機業家の間に介在して需給の道を開拓した。

仲買人は本綿問屋を兼業す 尙其の反面地方小機業家の製産せる綿布は一先づ之を岸和田に蒐集し以て一括して大口として大阪市場に直接移出したのであつた、

斯くの如く當時から岸和田に於ける綿糸布の仲買人は大方本綿問屋を兼業してゐた關係上、機業家との間に其の場に於て原料糸と自己の製布との交換も従前よりは遙に有利に且つ簡便に行はれる事になつた。

殊に之等小資本家は南泉州唯一の金融機關たる五一國立銀行を利用して、自己の生産物荷或は其の他の物權に依つて荷爲替の割

引又は之を担保に資金の融通を受け以て益々自己事業の擴張を計る事が出來た、従つて地方機業界は日を迫ふて隔世の觀を呈するに至つた。

斯くの如く岸和田は南泉州唯一の金融機關第五十一國立銀行の所在地であり、加ふるに仲買商並に問屋の所住地であつた關係上、其の數多しと雖も一として大阪問屋との間に直取引をなすの能力なき總て家庭工業的小規模に過ぎなかつた泉州一帯の機業家は期せずして蟻の蜜に於けるが如く此處に集り、之に伴ふて一般人家も各種商店も次第に其の數を増加するに共に其の急速なる伸展を示す繁昌振は、藩政時代から人口並に商工狀況に於て幾何の懸隔を存せず、寧ろ吾を凌駕してゐた近隣貝塚、佐野等の他町村其他商工村落の最早や絶對に隨從を許さざる域に到達し、遂に自然泉州に於ける商工業界の覇を掌握するに至つたのである。

斯様に觀察し來れば、岸和田發達の最近史上から見て今日の盛あらしめた其の基く源泉に溯る時、金融機關の先鞭それに相次いで認むべき一大功績者は、叙上の如く地方商工界賑興の上に目醒しき活躍をなせる綿糸布仲買商と同問屋であると斷ぜざるを得ない。

従つて之等發達の源動力は岸和田を漸展的に進ましめ、それが四ヶ町村を合併に導き、引いて今日の如き一大工業都市を形成せしめたものである以上、其の過渡期時代に於て演出された目醒し

き活躍の其の中に躍動せる中心人物は、曩に金融機關を創設すべく唱導し發起し創立經營せる人物等と共に、岸和田發達史上に特記して其の偉功を記憶すべきである。

其の三 岸和田煉瓦株式會社と 岸和田紡績株式會社

嚆矢代表的工業會社

我岸和田の過去僅々數十年に溯る狀態を考查し觀つて現今の勢狀を觀察すれば、當時は一の商工村落に過ぎずして、近隣の貝塚或は佐野等に比して遙かに凌駕されてゐた有様であつたのが最近に於て最早それ等他町村の隨從を許さざる域に到達した、其の原因を求めんとする時、之を南海鐵道の如き沿道一般的に受くる、受働的影響或は、これぞと云ふ程の良港を天授されてゐるでもない平凡なる水運の不遍的天惠等の如き殆ど均等的恩惠などに歸依せしめるわけには行かない、

之れ明かに岸和田は岸和田としての特種的發達系統から見ても、其の形体及び内容から見ても純然たる工業都市である以上、今日あらしめた代表的源泉として因果的に當然先づ金融機關の先鞭に次ぐに綿糸布仲買商及同間屋の活躍にあり此の二つを挙げたが、今更に之等二大源泉に次ぎ相並んで、天災地變の動機から地方發展の目的に出發して當地有力者の先見的着眼に基いて設立された嚆矢代表的工業會社「岸和田煉瓦株式會社」並に「岸和田紡績株式會社」の創設を挙げねばならない。

煉瓦會社の創立 岸和田煉瓦株式會社は明治二十年の創立であるが其の動機は、同十六年の旱魃、それに次いで同十八年梅雨季の洪水で飢饉相踵ぎ之に遭遇せる當時の細民は飢渴に泣くの有様であつた、然れども此の生活難を緩和すべく求むるに職なく、只徒らに座して創渴の苦しみを訴ふるの慘狀を呈してゐた

此の時に當つて地方有力者、山岡尹方、寺田甚與茂、金納源十郎の諸氏等多くの有志と計つて、その窮狀を救ふべく出來得る丈け多くの人間を使用せねばならない、そして最も多くの手數工程を経ねばならぬ事業を起さんと企畫した結果、最適なりと認められ、明治二十年七月、資本金貳萬五千圓を投じて創立されたのが即ち現在の岸和田煉瓦綿業株式會社の前身岸和田第一煉瓦會社であつた。

而して其の内容は目的の如く有ゆる工程に出來得る丈け多くの職工を集めて就業せしめ、殊更に利を見る事をせずして、専ら窮民の生活難を緩和し、その窮境を救ふべく營業は開始繼續されたのであつた。

勞働者需給の今昔 斯く當時岸和田の各種事業界が如何にも不振幼稚であつた狀態を記憶する目を以て、移して近時産業の興隆と共に、殊に未曾有の財界高調期の如きは、勞働者の甚だしき拂底を示した、

今や經濟界の低調につれて、一般事業界は稍沈靜の狀態にあり

と雖も、一般労働者の數に於ては、さしたる減少を見ない

殊に目下の各種工業界の趨勢傾嚮として、各自工場の能率増進をモットーに努力してゐる事は、綜合的に全体としてのみではなく、職工の一人々々或は其の個々に伴ふ單位的能率の増進の上に充分なる留意を拂つてゐる以上、決して贅員を雇庸してゐる筈がない、此の見解から出發して、試みに在岸各種労働階級の數を一瞥せば、在來の地方人は僅かに其の一部分に過ぎずして、その多くは他地方からの移住者を以て大部分を占めてゐる状態である

之れ勿論在來の地方人が減少を意味するものではなく、當地工業界の急速なる發達に伴ふ労働者の需要數に急劇なる膨大を來した結果の然らしむる處ではあるが、翻つて過去の記憶を辿る時僅々三十余年前の地方状況として、却つて職を求めんに何等の職業なく、斯くの如くして徒らに生活難に苦しむ地方労働者階級の剩員頗る多く、之等救済の意味に於て、如何なる事業を企畫せば出來得る丈け多くの人間を使庸し得べきかに頭を悩した時代のあつた事を今日の趨勢から想ひ比べたならば轉た隔世的言外の感なきを得ない。

そこに過去を想ひ現在を觀るの時一層當該會社の創立を以て、岸和田發達史上の恩人なりと認めざるを得ないのである

當時地方労働者の數に於て其の需給の上に多大の餘剰があつた事は、反面當地産業状態の未だ幼稚にして甚しき微弱さを明かに

語つてゐたものではあるが、同時に斯くの如く労働者の供給が需要に比して甚だしき餘剰を示してゐた事は之を將來に見て、容易にして安價なる勞力の供給を受け得て各種工業及其他産業の上に大なる勃興を見るべき資格を適確に指示してゐたものであつたと認め得るものである。

それ若し一地方が一大天災地變に襲はれ、又は或種産業經濟界の變動に影響されて其地方人の各種職業の上に大なる悲況を現出し爲に其れ等の生活を脅かす事あらば、彼等は自己生活安定の自衛上比較的有利にバンを求め得るに適當な方面に其居を轉じ或は其の職業を轉換して生活難を迴避せんとするは當然の欲求である此の時に當つて其の地方が各種産業界を通じての悲況であるとすれば、假令住み慣れた生れ故郷に愛着の念禁じ難く、容易に忍び難い愁しみありとも、座して食なく、死するよりは此の愛着、此の愁しみをも捨てて、生きんとする欲求の爲めには、總てを忍んで、故國を後に距離の遠近を問はず、事業の盛況地を慕ひ、自己に適する職業の多くして其の收入のより多額なる方向を辿つて居を轉じ去るは労働階級の常であることは、現實に其の實例の見易すき自然理である。

功績 されば當岸和田に於ても、明治十六年、十八年の饑饉が當時地方第三階級以下の生活に與へたる脅威及其後の餘波は、若し其のまゝに放鄭して置いたならば、少なくとも第三階級以下の住

民は漸を追ふて、故地を去り、生活の安定を求めて轉住する者の多かつたらうことは、今より想像するにさほど難くない。

斯かる際に、若し地方に憂慮の士なく、犠牲的投資をなすの有力者がなかつたならば、今日斯の如き興都を形成し得べかつた岸和田の地も、日に淋れ、月に衰頹の闇影を移して、寂たること近隣町村と撰ぶ處なく寧ろ貝塚、佐野等に凌駕されたまゝ、今日に至つたらうやも亦想像し得られる事である。

幸にして我地方の將來を憂ふるの士あり、生活難に苦しめられつゝある地方同胞救済の爲に、厚き同情の活躍奔走に盡瘁するの有志もあり、更にまた敢て利を見るの意志なくして巨額の資金を投ぜんとするの美しき金力者もあつて、そこに岸和田第一煉瓦會社の設立を見たつた事は、生活難の緩和策は直ちに地方労働者階級の、他地方に出稼の爲めに移住し去るを防止し、それが將來、當地工業の企畫の上に力強い聲援を與へ延いて其の後は反對に他より移住し來る者さへ日を追ふて加へ來る動機をなすに至つた。

斯くて労働者の數は減少することなきは勿論、寧ろ多きを加ふるの狀勢は日を追ふて益々勞力供給の容易さを増大し、迫つて當岸和田に一大工業の勃興を誘導し來つたのであつた。

殊に當第一煉瓦會社の創設は岸和田に於ける工業熱興起の第一聲であつた。

企業的前途と財界 當地實業家の頭には、勞力の需要に對する供給の道の頗る容易なる狀態を目のあたり觀取しつゝ、一面此の工業會社設立の刺激と影響とを受けて、春雨を天授せる木の芽の如く勃々として企業的前途が擡頭した。

此の頃周圍には一面既に綿糸布仲買商並に同間屋の活躍が開始されつゝあり、聽て一大紡績會社の運動起り、又一般商業界にも幾多の浮沈盛衰を経て、明治二十四五年の頃からは、漸次地方民の購買力も一入の増加を示すに至つたので、商家も亦次第に資金の潤澤を計るにつとめ、其の取引を擴大しつゝ、商界自ら自由競争の傾向を以て輸贏を勝ち得んとするの念、今や熾烈を極めんとするの狀態に迫つて來た。

斯くて明治二十五年には、岸和田は勿論泉州地方に於ける要望の實現たる、岸和田紡績株式會社の創立を見るに至つた。

此の間一時衰頹し切つた地方財界も叙上の如く、漸を追ふて恢復の徵候を現はし來り、地方民一般の生活狀態も次第に安定ならんとするの域に進んだので、敢て利を無視して窮民の救済地方奉仕的目的の上に立脚して營業方針を取つて來た、當該第一煉瓦會社も今後は逐次、營利工業會社としての本質に立ち入るべく漸進的に其の大綱を改變し、同二十六年十一月には、岸和田煉瓦株式會社と改稱した。

爾來日を追ふて煉瓦の需要は長足の進歩を見るに至つて、明治

四十年恰も四ヶ町村合併説の火の手は愈々明滅の境より脱して熾烈ならんとする頃は資本金を參拾萬圓に増大して一般營利工業會社と同様、製造工程に要する動力は人力に代ふるに機械力を以てするの必要な機運に際會し、新式機械の輸入を米國に仰ぐに至つた。

斯く觀察し、斯く推斷し來つたならば、自づから同會社が、岸和田最近發達史上の偉大なる功勞者であり發達系統上一大源泉をなしてゐる事は明かである、従つて當時同會社を發起し創立し經營せる輪廓内の人物は、當然岸和田をして今日あらしめた恩人なりとして記憶したいと信ずるものである。

岸紡創立當時の四圍と紡織界發展系統

新興都岸和田は、工業都市であ

ると前述したが、之を更に具體的に云ふならば、綿業都市＝紡織工業都市と稱した方が一層適切であらう。

現在市中林立せる煙突、櫛比せる工場と云ふ工場の大部分は、紡績或は綿布工場で、其の他の工場と云ふのは、實に寥々たるものである。

大阪地方は日本全國を通じての綿業中心地帯であり、且つ又泉州の地は、前にも述べた通り古來隣國河内と共に機業の旺盛な所で其の織出された綿布も一括して河内木綿の名を以て全國に聞えてゐる程だから、自然其の響影と刺戟とを受けて、岸和田紡織工業が少なからず、其の興隆を誘導され、其の發展を促されたこと

は事實であるには相違ない。

然れども之が大なる力をなし特に當紡織工業界が、近隣に一頭地を抜いて目醒しい發達を遂げたのであるとは、容易に首肯し得られない。

其の理由は當地が僅々の歲月の間に近隣町村の隨從を許さざるまでに、急速なる發展を遂げた原因を、南海鐵道の開通や、平凡なる水運の如き殆ど均等的恩恵に歸せしむる事が出來得ないと云ふと同一般である。

斯くの如き理由を認めると同時に異數の發展を遂げた其の出發點は、之れも亦、當岸田は岸和田としての特種なる資格及び發達すべく出來てゐた素質や勃興の誘因等に歸結すべきを認め得る、今之を過去の狀勢と時事の變遷系統から探究考查して見たい。

明治十六年及同十八年の天災地變は、慘たるまでに第三階級以下の地方民が生活を脅威した、そして其の餘波は、かなり長い間惰力を繼續して容易に恢復しなかつた。

幸にして、同二十年に之れが救済の目的を以て、岸和田第一煉瓦會社が設立された結果地方勞働者階級の離散を防止することが出來た。

假に一戸の轉住を防止することに依つて五名の人口の減少を防止するの結果に到達することは、之れ統計の示す數字である

工業界勃興の資格

之れ等の關係上明治二十年前後の岸和田は勞働者供

給の狀態が非常に潤澤な數字を以て示されてゐたことは疑いもない事實である。

斯うした狀態は兎も角も紡織工業に限らず、如何なる工業にせよ、經營者の少なからず頭を悩すことに屬する勞力需給の問題だけは簡単に解決されることになるのだから、事業を企畫する者には、頗る力強く感じたに相違ない。

されば岸和田を具体的に説明すれば紡織工業都市であり、且つ又其の發達について當地特種の誘因としては種々細大となく幾多の事實のあつたことは決して否定はしないけれども、今其の代表的事實として認むべきものを擧げんとすれば、自づから筆を以上の岸和田第一煉瓦會社の設立と因果關係をなして生じた、勞力供給の頗る潤澤であつた狀態に染めざるを得ない。

然して今日尙茲に此の事實を裏書すべき材料が、歴然として残つてゐる、それは次に述べんとする、當地紡織工業界勃興の上に直接至大の刺戟と影響とを與へた、岸和田紡織株式會社の現狀に徴して明かである。

岸紡と云へば、全國でも十指の内に數へらるべき、大會社であるにも拘らず同會社内の總ての建築物や施設に比して其の職工寄宿舎施設の餘りに遜色あり、且つ不完全なる事は他の一般同種會社のそれに較べても同様の感がある。

此の點については、岸紡自体其の經營關係者も等しく此の評に

對して否定もしなければ、殊更なる辨解も試みてゐない、

それは同會社沿革の上に當然の理由があるからで、其の理由とする處は、創業の當時から長い間殆ど、全部の男工女工が共に自宅よりの通勤であつた關係上、寄宿舎の必要が全然なかつた、その後最近に至つて、急激に同種異種幾多大なる工業會社並に個人工場が設立され、そこに勞働者の爭奪戰が演出されて、己むを得ず他の地方に職工を募集せねばならぬ、運命に逢着して始めて寄宿舎の必要を感じ漸次、其の都度繼ぎ々々に増設したもので、創立の當時最初から計畫的に建設したものでないから、勢い今日の狀態にあることは己むを得ないと説明してゐる。

兎も角も、法人個人を問はず大なる工場を經營せんとする者の頭には、職工の募集に、其の社宅寄宿舎に、寢食に、衛生に、修養に娛樂にそれ／＼少なからざる苦心を拂ふものである。

然るに岸紡創業當時の地方周圍の狀態は斯くの如き若心が微塵だも要しなかつた事實を以てするも、裏書の材料には充分であると信ずる。

愈々直接當地紡織工業界に痛切なる刺戟と影響とを與へ、之れが勃興の誘導をなした、大なる功勞者としては、是非關西紡績界の元勳全國を通じての斯界に於ても、最も良好なる成績を示し、其の重鎮をなせる我市の權威岸和田紡績株式會社の設立を推さね

はならない

岸紡創立當時の財界 明治二十年頃即ち岸和田煉瓦會社設立の前後は、天災地變の爲めに出現した、甚だしき不景氣の波動を受けて、當地財界は沈衰其の極に達してゐた。

聽て綿糸布仲買商並に同問屋の、漸次目醒しき活躍が起り、第一煉瓦會社の設立を見、一般商家の浮沈盛衰を経て、同二十四、五年の頃は、次第に地方民の購買力も増進し、銀行は益々利用せられ、各舗資金の増大を計り廣く取引を開始する者も多きを加へ來り、其の反面には、時勢の推移と經濟界の變動とに翻弄されて往古から其の名を誦はれた老舗中にも、破綻の連命に達着するもあり、反對に之れに代つて新に興隆する店舗も現れて來た。

斯く新陳代謝の間に遂次財界の恢復は、其處に稍一道の光明を認め得られるの域に近いて來たのであつた。

なべて財界の沈衰不況は事業界に、没落破綻を招來し、其れが復興の緒光は斯界勃興の兆をなすもの、將に岸和田の事業界は興隆の兆を見せて來たのであつた。

岸紡創立と功績 偶々當時地方選出代議士に佐々木政入氏があつた、氏は理財に精通し、殊に地方開發、殖産工業の振興の上に頗る熱心なる努力を拂つてゐた、嘗つて當地方の殷賑を謀らんと欲し、先づ工業界の振興を恒に心掛けてゐた。

恰も明治二十五年、寺田甚與茂、岸村德平？等の諸氏と協議を

重ね、紡績會社を起さんと、寺田氏等外地方有志二十餘名と共に連署を調べ、案を具して、同年十一月、時の府知事山田信道に向つて稟請した、然るに、山田知事は種々なる他の事情に事寄せて容易に許可しやうとはしなかつた、

此處に於てか佐々木代議士は、松方侯に謀り、侯の助力を得て漸く其の希望を達成する事が出來た、之れ即ち現時驍名を斯界に馳せてゐる、岸和田紡績株式會社である。

斯くて同二十七年一月、資本金は二十五萬圓を以て創めて開業の端を開き、爾來三十年間の歴史を閱みし其の間經濟界の動搖あるごとに、其の隆潜に伴ふ影響を蒙つて、經營者の少なからぬ苦心を要したことは、一再ではなかつたけれども、其の都度當事者の堅實なる經營振りは、大なる蹉跌を見せずして、比較的順潮に棹して今日の隆盛を見るに至つた。

當時岸紡の創設、それ自体が既に、當地紡織工業界の興起に至大の誘導的影響と、力強い刺戟とを與へたことであるのに、其の後更に堅實良好なる成績を示して發展を遂げたことは、一層斯界勃興の氣勢を助長したものであると同時に、今日ある岸和田工業界隆盛の上の甚大なる功勞者として稱へねばならぬ

而してこは單に、紡織工業並に一般工業界隆昌の功勞者たるのみならず、引いて人口の膨大を召來し、従つて一般商家の繁榮を來たさしめたことは、工業都市岸和田發達史の上に、至大源泉と

して、岸和田煉瓦株式會社と共に、前記「金融機關の先鞭」綿糸布仲買商及同問屋の活躍」と相併列して、三大源泉たることを疑はない。

此處にも、岸紡創立當時、以來今日に至るまでの同會社沿革史上の功勞者は、岸煉會社と同様、之れを移して以て岸和田最近發達史上の勳功者として特記せんと欲するものである。

第二項 綜合系統

發達の單純傾向 一地方が特に一頭地を抜いて、急激なる發達を示す場合は、其の發達の原因系統は比較的單純なものであることは幾多實例に徴して明かなことである。

新興都市たる、當岸和田も亦之れ等一般に漏れない傾向を以て發達し來つたことは、第一章に採録せる如く、最近の急速目醒しき發達史を語る上に於て、三大源泉を認め得られることに依つても、瞭然たるものであると信ずる。

然れども、斯くの如き傾向を以て推移して來たものであると云ふことは、争はれぬ事實ではあるが、また之れを絶対的新開地と同視するわけには行かない。

元來の深山僻地に、重要鑛山の發見其の採掘冶金或は、未だ曾つて斧を入れざる廣大な密林の伐採や製材等の啓蒙的事業開始に基因して人口、人家の集中し來つて成れる如き所謂新開都市とは、

自づから同一に視るわけには行かないことは云ふまでもない。

苟も千古の舊蹟に偲び、五百歳の史實を語る、今昔の因果を包藏する岸和田、そこには、今日の殷盛をなさしめた、粗細、大小幾多原因の存在してゐたことを疑はない。

今それ等多くの中、最近發達史を説くに於て、今日の殷盛をなさしめた、其の異數的結果の誘因基因として、三大源泉を經とし之れに緯をなすべき、手近かな事實を、年次的順を追ふて辿つて見たい。

此處に取り分けて斷るまでもなく、本稿たる第五期は、四ヶ町村合併時から市制施行までの、極めて短い幾月の間の史實で其の間約十年間の推移變遷と市制實施當時の現状から眺めて、當岸和田の形狀、内容共に工業都市たりとなす綜合的結論を前提とし、且つ急速なる發展を遂げた、其の原因、資格系統を辿らんとするものであることを添録して置く。

官衙學校の所在 當地は小さいながらも、岡部落の城下であつた、そして廢藩置縣の際は、堺縣に屬するまでの極めて短時日の間ではあつたが、岸和田縣廳と云ふ門標さへ見えてゐた。

斯うした關係上、明治四年七月十四日附を以て藩知事免官の辭令を手にした、舊藩主岡部長職子は、同年八月八日東京に向つて出發した其の當時の人心動搖の如きは、實に慘たる程の悲哀を以て説明するの外はなく、然も間ないこと同年中に堺縣が置かれ、

従つて當地方政治の中心は、自づから堺に移動してしまつたけれども、尙少なくも、泉南郡としては郡役所の所在地であり、其の他の官衙學校の所在でもあつたことは、之れ近隣に一頭地を抜いて發達を遂げた系統上、見逃がすことの出来ない一つの資格である。

官公署 今官公署について見るに、現在の泉南郡は、維新の初め堺縣に屬し、明治五年には、南、日根の兩郡に分たれ、同十三年四月郡區町村編制法施行の際に兩郡役所共に之れを岸和田に設置することとなり同年五月一日開廳、其後同二十九年四月一日に至つて兩郡を合併して、泉南郡と改稱し、初代郡長に渥美氏赴任其の廳舎は現在の位置を以て今日に至つた。

岸和田郵便局、は明治五年一月十日の創設で最初は當時岸和田町大字北、Ⅱ現在の北町に開局し、同三十二年二月一日同町堺町、即ち現在の位置に移轉したもので、初代局長は山田久作氏で、明治五年一月十日拜命同八年一月十四日、内務卿の命を以て、七等郵便取扱役を仰せ付らるゝとある、尋いで三等郵便局長の名稱は同十四年九月からである。

岸和田警察署に明治七年本町光明寺附近の民屋を借家して、其の廳舎としたに始まり、其後も濱町の民家に、同十三年以降は本町なる舊藩主が物見所をと云ふ様に所々轉々として借舎住居をしてゐたものであつたが十八年十二月に至つて漸く現在の位置に

初めて官設の廳舎が出来上つた、然るにそれが不幸にして同三十五年一月全焼の災禍を被り現在のものは其の後の建築に成つたものである。

岸和田區裁判所は、明治二十三年堺區裁判所岸和田出張所として當時岸和田町大字北字上砂町の一家に開設し翌二十四年獨立して、岸和田區裁判所と稱し、初代判事として濱野芳雄氏が赴任した、其の後の廳舎は、二十五年一月當地及び近郷有志の寄附行爲に依つて、建築費一千二百圓を以て其の位置に改築された、其の後大正二年に至つて四月二十一日行政整理の結果、最初の如く堺區裁判所に附屬する一岸和田出張所に縮少され、更に同十年現在の位置に新築廳舎を建設し、また兩び獨立して岸和田區裁判所と改稱して今日に至つた。

岸和田稅務署、は其の初め明治二十二年七月收稅部岸和田出張所なる名稱を以て設置され、初代署長として八田諒氏赴任、其の後屬官制改正の結果、翌二十三年一月岸和田直稅、間稅兩分署と改め、二十五年十二月、更に岸和田收稅署と改稱し、同二十九年十一月に至つて現名稱の岸和田稅務署と改稱して今日に及んだ。

其の管轄區域は、最初から南、日根の兩郡内で、兩郡合併後も變化がなかつた、廳舎は初め一部を割いて之れに充ててゐたが、同二十六年十二月本町の民家を借りて之れに移り、同二十九年十一月現在の廳舎を新築移轉して今日に至つたものである。

中等學校 學校と云つても、小學校は別として、少なくとも泉南一圓の子弟を集めて教育するの機關としては、府立中學校及び郡立高等女學校の二校がある。

府立岸和田中學校、は其の初め明治三十年三月、大阪府第六尋常中學校として設立の告示が發表され、同年五月生徒を募つて、當時岸和田村なる泉南俱樂部跡の假校舎内に於て授業を開始した、現在の校舎に移轉したのは三十一年五月で

明治天皇 攝河泉の野に大演習を親しく御統監遊された折當校に臨御々休憩の榮を辱うしたのも同年十一月のことであつた、

三十二年四月中學校令の改正に伴ひ校名を大阪府立第六中學校と改め、次いで三十四年四月更に文部省告示に基き、現名の同岸和田中學校と改稱して今日に至つた。

郡立泉南高等女學校、は明治三十四年四月の創立で同年六月三日舊岸和田村城内、日南俱樂部の家屋を假校舎として授業を開始し、逐年教室、講堂の増築を試み四十一年度には、既に十學級、三百三名の生徒を收容し得るまでに擴張したけれども、女子教育に對する地方一般の要求は益々増大し到底姑息の計畫の満足せざるところとなり、遂に四十三、四兩年の繼續事業として、現在の位置に現在の校舎の竣工を告げたのは、四十四年九月三十日以來今日に至つた。

斯くの如く、よし郡と云ふ一小地方にせよ、そこに岸和田が政

治、教育の中心をなしたことは、當地方に一頭地を抜いた發達の上に目過すべからざる、基因の一つとして認めざるを得ない。

港灣の修築

岸和田港、其の位置に於ては申分がない、市の背面港として適配し且つ茅海沿岸の中央に位してゐる、

されど水淺く規模も甚だ小にして眞に港灣としての資格は極めて乏しいものである、唯これ修築に依つてのみ、始めて港灣の意義をなし、用をなすに過ぎない天然態に屬することは頗る遺憾であるが、然しながら有するは、無きに優ること遙かなるは勿論である。

抑々岸和田、の背面、淡路島に望む海岸を港灣とすべく施した修築は、岡部藩の中世期以後を以て始めとする。

之れを舊記に徴して見れば、人皇百十八代光格天皇の寛政三年今を去る百三十五年前、八月高浪の爲めに、人家、土藏等は流失し、船置場もなき有様となつた際、時の藩主岡部美濃守長備侯、其の浦奉行伴丈左衛門に命じて土砂留並に波止場を築かしめたに始まつたことを知る。

其後幾度か修築を試みたけれども、遂に持久的効果を收め得なかつた、近くは明治十三年附近町村及貝塚町の賛助を得て修築を其の筋に願ひ出たが、認可に至らず、越えて同十七年に至つて、西風のもたらす波濤並に之れに伴ふ土砂の堆積を除去する目的を以て、現形の突堤を築いたのであつた。

從來本港の修築費及び維持費は、維新前までは藩費其の後は岸和田單獨の負擔に歸してゐた、只其の間明治十七年頃は總額に對する三分の地方費補助を受け得る事になつてゐた、

元來本港は一の避難港に過ぎなかつた關係上、一般漁船並に航行者に利害を及ぼす港灣であると理由の下に漸次補助費の増額を府に迫り、四ヶ町村の合併前後は總額に對する七分の補助を受け得る域に達してゐた。

斯くの如く地方人が、この資格の甚た乏しい港灣を修築し浚渫を加へて、港灣としての意義あらしめ、而して之れを利用せんとするの要望と努力とは、不完全ながらも、次第に平凡なる海岸をして港灣化せしめた。

總て財界は、明治二十七、八年、同三十七、八年の戦役前後を通じて盛衰波動の跡を遺して、商工界は漸を追ふて擡頭し來り、汽船船出入、港灣利用のリズムも漸階化しつゝ増加して來た。

今その推移の様を、明治三十六年以降、四ヶ町村合併時の同四十五年までの十ヶ年間の統計上の數字を以て示せば、其の出入隻數は汽船に於て見るに、三十六年の二、三十七年の三、三十八年の三、三十九年の二、四十年の五、以上五ヶ年の平均は三集を示してゐたが、其の翌四十一年は一躍二十九隻、四十二年は四十二、四十三年は三十九、四十四年は六十一、四十五年は七十三、以上五ヶ年の平均は四十九隻と云ふ彪大を現出した、此の外和船に於

ても大同小異の結果を示してゐる、斯の如き變遷状態を見る時、如何に不完全なる港灣であるとは云へ、岸和田發達の上に與へた一助の力を無視するわけには行かない。

工業界 以上は當地發達資格上の輪廓的原因とも視るべきものであるが、更に工業都市岸和田として、三大源泉と經緯關係をなして直接内面的に如何なる原因が存在するかを辿る時、如何に最近地方實業家の多くが、工業的方面に着目して、企業とし企業殆ど其の總がこの方面に向つて投資されたかと云ふことを窺ふことが出来る。

舊藩時代には、其の末期に於て、稍物珍らしく視られてゐた工場としては、仁孝帝の弘化元年、當藩は岡部内繕正長和侯の時代、今を去る八十年前に生れた、松浪グラス工場丈であつたが、維新以後に入つては明治三年に、東瓦製造所、同四年には、四ヶ町村合併時の中心人物たる宮内可一氏の先代棟吾氏に依つて、宮内白粉製造所が起された、同五年に至つては、當時未だ無職であつた士族の爲めに設立したのが煉瓦製造所、同十八年には、また士族間の有志相謀つて、奉還賜金の一部を割いて出資し、士族間に職業を授け其の利を以て、其の間の不遇の士を相互扶助すべく士族授産場を起し、ネル及びメリヤスの製造を開始した、更に同二十一年七月には、彼の岸和田煉瓦株式會社の設立、次いで同二十五年十一月には、當地實業界に一劃の新生面を展開し、從來家庭工業

に過ぎなかつた、小規模の機業界に革新的曙光を閃發せしめた岸和田紡績株式會社の創立を見、同二十八年十二月には、日清戦後の財界を受けて、寺田一門の有力者、同元吉氏の手によつて資本金五萬圓を以て寺田製綿所が開設され、同三十年一月には阪上竹簾工場、三十七年日露戦役の最中に當時の青年實業家中村幸次郎氏に依つて、中村鉛筆株式會社が創立された、

總て日露戦役の克復後に至つては、各種事業界勃興の氣運を受けて、同四十年一月に二ツ山槐物工場の創業、同年同月には、筋海町の有力者川崎徳太郎氏を中心とする、其の親族間の投資に依つて、現在の川崎綿布株式會社の前身たる川崎木綿合名會社が設立された、

尙同年三月には、四ヶ町村合併後第一期の町會議員たりし、並松町の有力者日吉端の幹旋盡力の功に依つて、大阪窯業株式會社の岸和田工場が設立操業を開始し、同四十一年一月には藤井吉平氏外諸氏の奔走盡力により五十萬圓の資本金を以て、泉州織物株式會社が創立、引續いて、寺田元吉氏其他諸有志に依つて、工業動力及電燈の供給事業たる、和泉水力電気株式會社が百五十萬の資本金を以て、四十二年六月に創設された、同四十四年三月、岸和田は將に合併論の戦端は關なるの時、岸和田、貝塚兩地の有力者、寺田元之助藥師徳松の兩氏等が奔走幹旋に依つて、資本金十五萬圓を以て、關西製綱株式會社が創立、同年七月には、岡田伊

平、堺安之助、淺田吉松等の諸氏に依つて、泉州瓦斯株式會社が生れた。

數へ來れば、斯くの如しである、工業界の目醒しき此の發展膨張振り、岸和田は工業都市なりとの稱亦故なきにあらずである。

商業界 繼つて商業界を觀察するに、舊藩時代から一の商工部落を廓成してはゐたが、其の商況に至つては、甚だ振はなかつた。

然るに、明治十一年地方あらゆる商工界伸展の上に至大源泉をなした、第五十一國立銀行の創設は、泉州と云ふ一面の碁盤の上當代の第一人者が、熟慮して投じた、當然の必勝を期して、動かすべからざる一個の石と同意義で、之れ我岸和田が泉州の商工界に覇をなすべく期して投資せる、偉大なる企畫であつた。

尤も藩政時代にも、兩替店と稱する、小規模の金融機關はあつたけれども、斯くの如きは商工界の發達伸展につれて、既に利用の間に合はない早や影を没すべき運命の上に立つてゐたものであつた。

總て國立銀行を中心に、工業界と同様商家の活動が起り、同二十年の頃以降は、綿糸布仲買商の盛んなる活躍と木綿問屋の伸展を示し、岸紡開業の頃即ち、二十七年十月には、岸和田貯蓄銀行の設立あり、第一次商工界勃興期たる、二十七、八年戦役後、同三十年九月には、一般事業界の伸展に伴ふて、和泉貯金銀行の創立を見るに至つた。

また一般商家に於ても、浮沈盛衰の推移を経て、明治二十四五年の頃から漸次、地方民の購力増進につれて、盛況に向ひ、同三十一年南海鐵道の開通は、當地商工界に一段の好影響と特種の刺激とを與へた。

斯くて、三十七、八年日露の役の平和克復後は、第二次勃興期として、事業熱に於ける一人の勃隆と共に、商家店頭格段の繁盛を召來し、同四十年十月には、先代寺田利吉氏に依つて、寺田銀行が將來に來るべき風雲に乗すべく目ざして設立した。

以上の如く商業界變遷の跡を眺め來れば、銀行業者以外の一般商家としては、綿糸布仲買及び問屋の活躍を措いて、發達史上特筆すべき程の店舗を見ないが、

然し四十年の頃から四十四、五年までに至る間、之れ等四銀行の一日の取扱金額、多きは貳百萬圓に達してゐた事實に見ても、工業界に伴ふ一般商家の發展、膨大の様を窺知することが出来る。

惟ふに、もとく日用品其の他物品を、直接消費者に販賣する種の一般商家は、都市發達の素因、基源ではない、之れ人口の増加及び繁き往來につれて、當然生れ出づる結果である。

工業其の他の事業は、人口を呼集増大し、其の人口は、日用必需品を求むべく商店を作る、

唯、問屋及び仲買商は、之れと趣きを異にする處あり、即ち各地各種物産の集散仲介を掌り、銀行はまた金融の道を授けて、人

口の寄集往來を現出する、此の點に於て、等しく商業と云ふも、自づから、そこに多少の見解を異にせざるを得ない、即ち地方發展殷盛の上から見て、後者は素因、基源をなし、前者は結果的要素をなすものと見做すことが出来る。

然れども商店は都市の裝飾であり、花である、一般人情は、事情の許す範圍に於てなるべく便利、殷賑の地に向つて、其の生活點を展開せんとするは當然の歸趨である。

されば、勞働者供給の安易が、事業創設の基因誘導をなし、其の事業の發達に、伴ふて人口の増大を召來し、結果は地方の殷賑に歸着せしめたと等しき關係より、最近の發達系統を語る上に於て、銀行、問屋仲買商の如き之れを純然たる發展の誘因基源としての功勞者と認むべきは勿論、一般小賣商家の膨大も亦至大源泉と經緯をなす要素として、一面原因に基く結果、其の結果がまた次の原因をなすものとして、一の功績者として取扱つて置きたいと信ずる。

斯くの如き變遷系統を辿つて、全面に、間斷なく殊に最近の如きは、加速度を以て發展し來つた、所謂岸和田と稱せらるゝ一輪廓内に於て、轉じて行政的方面の變遷を辿るべく、そこに目を移すならば、廢藩置縣以前は、此處を三大區劃となし、元の岸和田町及び濱町を以て岸和田と稱し、岸和田村は獨立せしめ、沼野村は掃守郷に屬してゐた。

維新に及んで、沼野村、岸和田村、濱町、岸和田町を合併して、岸和田と稱したことは、是れ今、四ヶ町村合併史を採録するに當つて、最も重視すべき事實として記憶したいのである。

維新たる明治の維新、政事は七百年の舊弊を脱し、一天萬上は古今の明君、政治の大綱は一視同等、行政眼は之れを絶對の大局に置いた。

此の時に當つて、既に四ヶ町村を合して一としたことは、大局から見ても、當然賢明なる措置なりしとして、今日に之れを惟ふも一種の快感を禁じ得ないのである。

然るに其の後、再參、各町村に併離の變遷があつたことは、之れ云ふまでもなく、舊來の情弊と只去り難き情實と將來及び大局に思慮なき姑息不明の陳情を基礎とせる、偏見的行政區劃たるに過ぎなかつた。

さて明治十三年再び大字なる四ヶ町村に分立し、戸長役場を置き、更に又十七年に至つては、各戸長役場を合して、岸和田聯合役場となし、同二十三年の町村制發布に際しては、三度分離して、四ヶ町村とした。

總て輪廓内の全面的狀勢は殆ど隔世の進歩發達を示し來るにつれて、各分離町村間の關係も亦、漸次不分離的事狀を醸成し、學校問題に、港灣其他土木關係問題等に其他幾多、歲月を追ふ

て多きを加ふるのみであつた。

斯くて、明治三十三、四年頃以來は、有志間に合併の必要説を唱導するところとなり、四十一、二年頃となつては益々眞劍味の主張を耳にするに至つた、越えて四十三年に入つては、促進、尙早の兩派相對立して、戰陣を構へ、互にしのぎを削つて頗る八釜敷しかつた、四ヶ町村問題の本舞臺は愈々此處に展開されたのであつた。